

国立
国会
図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.12



世界図書館紀行

プランゲ文庫「再訪」

ープランゲ文庫の現在をさぐるー

ビジュアル資料を探してみませんか
ー動物の画像を例にー

国立 国会 図書館 月報

NO. 752
DECEMBER 2023

CONTENTS

1 『河合ダンスグラフィック』

— 芸妓バレエ団とモダンイズム —

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

5 世界図書館紀行

プランゲ文庫「再訪」

— プランゲ文庫の現在をさぐる —

14 ビジュアル資料を探してみませんか

— 動物の画像を例に —

25 館内スコープ

人と資料の出会いを手助けする仕事

— レファレンスサービスの現場 —

26 本屋にない本

『ジャムコミ』 JAMSTEC comics

27 NDL TOPICS

29 年間索引



表紙：
『本草図譜』巻 65 から
岩崎灌園 著 [江戸後期] 写 1冊 26.0×18.2cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555972/1/19>

『河合ダンスグラフィック』 —芸妓バレエ団とモダニズム—

古野 朋子



「扇」(第1輯)

『河合ダンスグラフィック』第1輯、第2輯

河合ダンス編輯部, 1930 <請求記号 VA211-164>

『Kawai dance = 河合ダンスグラフィック』第3輯

河合ダンス編輯部, 1931 <請求記号 Z72-V554>



第1輯表紙

昭和モダンを感じさせる表紙を開くと、白塗りの少女が踊っている。これはいったいなんだろうか。「河合ダンス」というからには舞踊団なのだろうが、洋風の衣装なのに和風の化粧に違和感があるし、バレエであれば「らしくない」いでたちだ。

彼女たちの本職はなんと芸妓(芸者)である。芸妓といえば日本髪に和服で日本舞踊、すなわち伝統文化を受け継ぐ存在で、ダンスはそぐわないように感じる。

河合ダンスは、大阪道頓堀の宗右衛門町にあるお茶屋「河合」を経営していた河合幸七郎(かわいこうしちろう)が大正10(1921)年に立ち上げた舞踊団である。ロシア人バレリーナを招いてレッスンしたというから本格的だ。その成果を座敷で披露するだけでなく、大阪中之島の中央公会堂で大正12年6月に初公演、大正13年1月に初東上、翌年から帝国劇場で定期的に公演するに至る。その後も全国各地で公演を重ね、『河合ダンスグラフィック』は昭和5(1930)年1月の帝国劇場公演にあわせて創刊されたものと思われる。ローティーンとおぼしき少女も含めて、規模は数十人程度であったという。

誌面を見ると、いわゆるバレエ(アンナ・パブロワが来日公演で踊った「アマリラ」もある)のほか、タップダンス、大正14年に来日したアメリカのモダンダンスの先駆とされ



(右)「人形のダンス」。(第1輯)
「小さい頭の中は芸術で一杯です」との文章が添えられている。



(左)「スケルツォワルツ」の一場面と思われる。(第2輯)
(下) バレエ「火の鳥」から一部取り入れたという場面で、衣装はフランスから取り寄せたという。(第1輯)



るセント・デニスとテッド・ショーンのデニ
シヨーン劇団のもの、レビューなど、当時最
新のものを取り入れていることがわかる。ま
た、児童劇、軽業、寸劇風のものも見受けら
れ、幅広さにも驚かされる。

そもそも日本において、舞台上で客席に向
かってダンスを披露する団体は、明治44
(1911)年に創設された帝国劇場歌劇部
が初期の代表例である。大正中期、その経験
者たちによる浅草オペラが大人気となる一
方、大正3(1914)年に宝塚少女歌劇団
が初公演、これに倣った^ま団体が各地で生まれ
た。河合ダンスもその一つとみなされる。バ
レエダンサーの来日も相次ぎ、大正11年には
アンナ・パブロワが来日している。かように
ダンスが大衆の目に触れるようになったのが
大正時代なのである。

しかしなぜそれを芸妓が行ったのか。河合
は「舞踊が従来のま、ではどうも客の感興に
適せぬ」「それにはどうしても、民衆的な西
洋の舞踊でなくてはならぬ」と述べる²。この
ような志を実現するには、自身の手元にいた
芸妓たちをダンサーに仕立てることが近道と
考えたのかもしれない。芸妓は伝統文化を受
け継ぐだけの存在ではなかった。

また当時、芸妓はより芸や教養を磨く必要
性があるという芸妓改良論が説かれていた。
そんな中、こうした西洋風のものを取り入れ

河合ダンスとジャズ

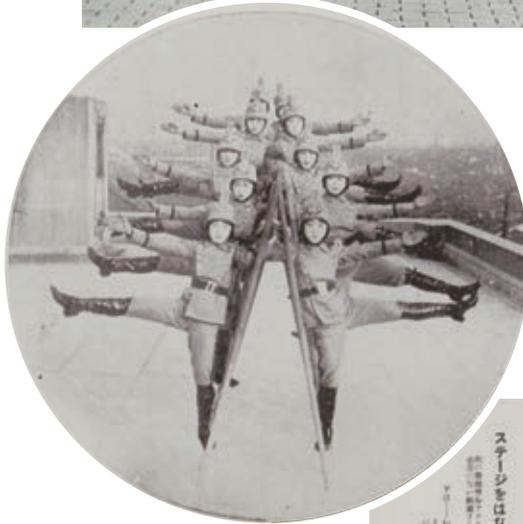
河合ダンスの芸妓たちはジャズの演奏も行っていた。レコードには、当時流行していたシロフォン（木琴）やサキソフォンの演奏が残されており、それらは「歴史的音源」(<https://rekion.dl.ndl.go.jp/>) 参加館・国立国会図書館内で聴くことができる。「河合ダンス団」「河合ダンス少女団」「河合サキソフォン・バンド」の名義がある。

1920年代から30年代の大阪はいわゆる「大正時代」で、様々な娯楽で賑わい、ジャズも盛んであった。服部良一も自伝『ぼくの音楽人生』で河合ダンスに触れている。



(上) シロフォンとサキソフォンの演奏風景。(第1輯)

(下) 『ビクター・レコード音譜目録』(日本ビクター蓄音器, 1929.2) <請求記号 YM2-112>に掲載されている河合サキソフォン・バンドの練習風景。



(上) デヤボール(明治から昭和初期にかけて流行した、棒二本の先に紐をつけ、紐でコマを回したり上下させる玩具)を用いた演目。(第2輯)

(中) 「火事」と題した、消防団の青年たちと美女との恋愛と、消火の動作を組み合わせたストーリー仕立ての演目。あらすじも掲載されている。(第3輯)

(下) オフショットのページもある。(第2輯)



た「モダン芸妓」は注目された。河合ダンスは、創立翌年の新聞記事で「芸妓が在来の三味線と舞扇だけに執着してゐては時代に遅れますといふ素的に新しい主張」と紹介されている。⁽³⁾ 萩原朔太郎は昭和2(1927)年に、「現在の日本に於ける唯一の『真正な芸妓』は(中略)大阪におけるあの所謂ダンス芸妓がそれである」と河合ダンスを讃えた。⁽⁴⁾

さて、河合ダンスの公演の評判はどのようなものであったか。雑誌『帝劇』には「お座敷芸としてのダンスでなく立派なダンス団」(国民新聞)、「駒菊といふのが如何にもうまい、あれだけ踊れるのは日本に幾人もゐないだらう」(報知新聞)と高く評価する新聞評の転載が並ぶ。⁽⁵⁾ また、団体名鑑には「文芸演劇映画舞踊団体」の項に宝塚音楽歌劇学校、日本舞踊協会らと並んで掲載されている。⁽⁶⁾ 河合ダンスに対しては、「エロ舞踊の家元」といった声もあったが、河合は本誌の中で、河合ダンスは「エロチックや、グロテスクを売物とするいかゞはしい卑猥なるダンス」とは一線を画し、「スポーツ精神を充分に發揮」した作品や、欧米ダンス行脚で着想を得た作品を発表すると述べている。⁽⁸⁾ 女性の芸能者への目線や、それをめぐる言説も興味深い。

全盛を誇った河合ダンスだが、昭和7年にスター駒菊が病気により引退し、芸に専念するためのお茶屋との分離が招いた経営難など

あしはらえいりょう
蘆原英了コレクション

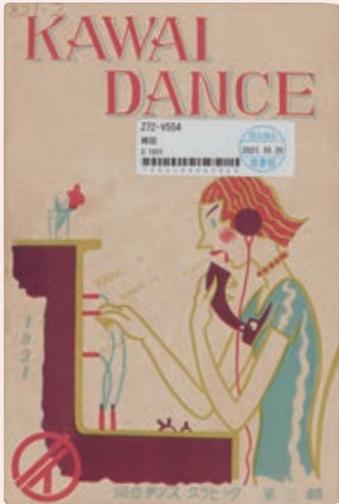
当館所蔵の第1輯、第2輯と公演プログラムは、バレエやシャンソンの研究者、評論家である蘆原英了（1907-1981）のコレクションである。

これらの資料は、昭和5（1930）年、23歳の蘆原が帝国劇場で河合ダンスを観劇して入手した可能性がある。パリ留学前、評論家になる前の若き蘆原の目に、河合ダンスはどう映ただろうか。

（参考）リサーチ・ナビ「蘆原英了コレクション」のページ

https://navi.ndl.go.jp/collection/theme_honbun_101078.html

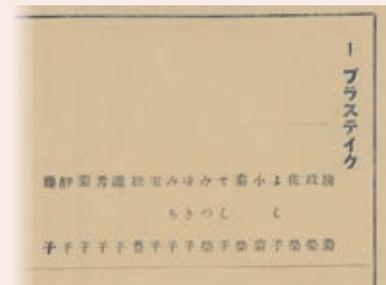
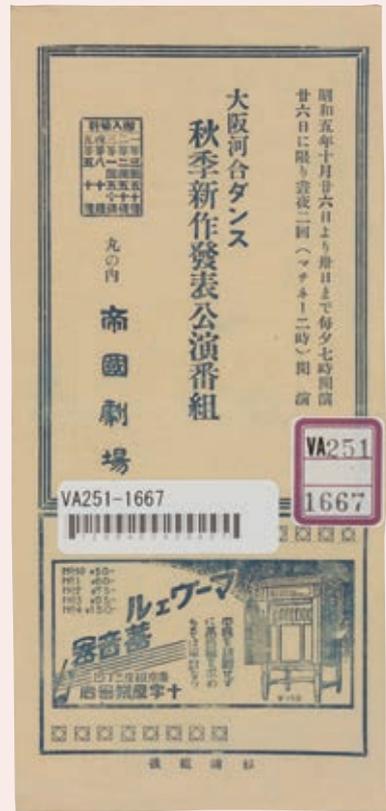
コレクションは洋書約5,400冊、楽譜約5,200点、レコード約9,300枚をはじめ、各種公演プログラムやポスター、錦絵、自筆ノートを含む多様な資料で構成されている。



（右）『河合ダンスグラフィック』第2輯表紙

（左）同第3輯表紙

いずれもA5版、1冊20銭。本文紙は光沢のあるアート紙。ほとんどが写真ページのグラフィック誌で、昭和11（1936）年創刊の『宝塚グラフィック』より6年も早い創刊である。



「大阪河合ダンス秋季新作発表公演番組
 丸の内帝国劇場」1930 <請求記号 VA251-1667>

昭和5（1930）年10月公演のプログラム。演者名はすべて源氏名であることが特徴的。

- 1 広島では料亭「羽田」による羽田歌劇団が大正7（1918）年に創設、ここでも芸妓がダンスを踊った。
- 2 大大阪画報社 編『大大阪画報』大大阪画報社, 1928 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1190484/1/440>
- 3 「芸妓団の喜劇 声楽も練習中」（『大阪毎日新聞』1922.9.19 夕刊2面）<請求記号 YB-7>
- 4 萩原朔太郎「新芸妓論」（三宅孤軒『芸妓読本』全国同盟料理新聞社, 1935） <https://dl.ndl.go.jp/pid/1054925/1/65>
- 5 「大阪河合ダンスパレー団帝劇公演評判」（『帝劇』伊太利大歌劇号, 1925.2） <https://dl.ndl.go.jp/pid/1514230/1/18>
- 6 梶坂昌業 編『団体総覧 第2回（昭和9年版）』大日本帝国産業総聯盟団体研究所, 1934 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1688527/1/667>
- 7 「河合ダンス十月末上京」（『読売新聞』1930.9.16 朝刊10面）<請求記号 YB-41>
- 8 河合幸七郎「我が辿りし跡を顧みて」（『河合ダンスグラフィック』第3輯）
- 9 河合幸七郎「うまいもの」（『あまカラ』13, 1952.9） <https://dl.ndl.go.jp/pid/3542969/1/11>

○参考文献

- 渡辺裕『日本文化モダン・ラブソディ』春秋社, 2002 <請求記号 KD151-H1>
 芝田江梨「踊る芸妓たち」（神山彰 編『忘れられた演劇（近代日本演劇の記憶と文化1）』森話社, 2014）<請求記号 KD431-L8>
 倉橋滋樹, 辻則彦『少女歌劇の光芒 ひとときの夢の跡』青弓社, 2005 <請求記号 KD597-H27>

も重なり、昭和11（1936）年10月の神戸での公演が確認できる最後のものとされる。戦後、河合は「いまどきの娘さんはパレー、パレーとおつしやるが、わたくしのやつてました河合ダンスは其のはしりで、戦争とともにすべておじゃん（略）何しろお茶屋に芸妓の組織しているパレー団があつたのですから、御存知ない方には珍らしいのではないかと思います」と書いており、すでに遠い過去のこととして扱われている。残された資料だけが、「モダン芸妓」の時代へタイムスリップさせてくれる。



世界図書館紀行

メリーランド大学図書館 プランゲ文庫

プランゲ文庫「再訪」 いま —プランゲ文庫の現在をさぐる—

吉家 あかね

1992年以来、当館はメリーランド大学図書館との共同事業のもと、プランゲ文庫の所蔵する出版物の複製物を収集しています*。わたしはその共同事業にかかる当館の駐在員として、2019年9月から2023年4月までワシントンD.C.に滞在し、プランゲ文庫の息吹きのようなものに間近で触れてきました。東京ではパソコンのディスプレイに映し出される真っ平らな画像でしかなかった資料の現物、あるいはそれまで見たことのなかった資料の実物が学内の授業や展示会に使われ、学生や研究者から活き活きとした反応を引き出し、さらには日本研究の材料となって学外に羽ばたいていくのを何度も見かけたものです。

当館で（モニター越しに）ご覧いただけるプランゲ文庫資料**の紹介にも頁を割きたいところですが、今回はあえて、現地で見えたプランゲ文庫の立体的なありようをご紹介しますと思います。決定的に重要な日本関連コレクションを持つプランゲ文庫はいま、どんなふうになっているのか——

* マイクロフィルムにより雑誌と新聞を収集した後、2005年以降は、図書をデジタル画像で収集中です。

** “Gordon W. Prange Collection”. リサーチ・ナビ . <https://rnavi.ndl.go.jp/occupation/jp/Prange.html>



プランゲ文庫とは？

メリーランド大学図書館特別コレクション部門のひとつとして、ホーンバイク図書館にあるゴードン・W・プランゲ文庫（以下プランゲ文庫）は、日本が占領下にあった時期（1945-1952年）に関する資料を所蔵するアーカイブです。そのコレクションの礎として多くを占めるのは、占領軍が1949年まで行った検閲のために収集した図書、雑誌、新聞、写真、地図、ポスターなどです。占領軍の一員として戦史編纂を担当したプランゲ博士が、従軍前に歴史学の教授として勤務していたメリーランド大学にそれらの資料を移送したことに、その由来があります。プランゲ文庫の所蔵資料は、占領期の検閲実態を伝える史料として、あるいは希少出版物を多く含む資料群として、研究者に限らず、一般の方々にも多く活用されています。



(上) プランゲ文庫に収められている日本の出版物。
 (左) プランゲ文庫スタッフの皆さん。右から、コーディネーターの清水レゼック素子 (Motoko Shimizu Lezec) さん、キュレーターズのジェンキンス加奈 (Kana Jenkins) さん、資料保存担当のカースティン・ガフケ (Kirsten Gaffke) さん。
 Photography by Tory Salvador, UMD Libraries (3点とも)

寄贈資料

プランゲ文庫は、検閲のために占領軍が収集した資料以外にも、占領軍に関連した公的な文書やオーラル・ヒストリーなど、様々な資料を所蔵しています。ホームページには、その所蔵資料の全体概要としてこう書かれています。⁽¹⁾

商業出版物はもちろん、非営利団体や組合、さらには多数の個人による出版物を含む資料群は、当時のあらゆる人々の「声」を反映しています。

プランゲ文庫資料から聞こえるその「声」の多くは出版物を介した、日本国内からのものではありません。日本にやってきた個人の「声」も少なくありません。プランゲ文庫の特徴的なコレクションのひとつとして、日本に滞在したアメリカ人が公私にわたってその生活を記録した文書や写真類を含む寄贈資料⁽²⁾があります。これらが人生の一時期を過ごした戦後日本はどんなふうであったか、かれらは日本に何を思いだしたか、そして日本人はかれらの向けるレンズにどう応えたか——写真のフレームのなかには、「新奇」な文化への好奇心に満

ちたアメリカ人の、あるいはその被写体となった日本人の無数の「声」としてのまなざしが詰まっています。

数ある寄贈資料のなかで、わたしがとくに興味をひかれたものに、「マリー・コーラー・スライド (Mary Koehler slides)⁽³⁾」があります。占領軍の天然資源局付書記官であったコーラーは、PX (占領軍の売店) でキヤノンのカメラを入手し、1945年から1949年の5年間にわたって日本での経験をカラーのスライドフィルムに収めました。色彩豊かな画像で戦後日本の光景を見られることも、この資料が貴重である一因ですが、この資料をさらに珍しいものにしてるのはその構成です。コーラーはスライドの一部を「The Japan I Knew - 1945-1949」というタイトルの下、スライドショーの上映様式に仕立てました。

コーラー自身が解説するナレーションが吹き込まれたカセットテープとその原稿の効果もあり、この資料全体を通して、コーラーが日本で目にしたものや人々に向けられた慈しみが余すところなく伝えられる一方、そのまなざしと言葉には、おそらく本人の意思に反して、敗者に対する容赦のない寛容ともいえるような気配があります。また、コーラー



(上)「マリー・コーラー・スライド」一式（上映用スライド・トレイとその他のスライド、ナレーションの手稿と浄書、ナレーションを吹き込んだカセットテープ）

(左)「マリー・コーラー・スライド」の特色のひとつである、人物写真の一部を並べて撮影したところ。



が生前にこの資料を友人に託し、さらにその友人の子息が引き継いだ後、その寄贈先としてプランゲ文庫を見出したという経緯には、異国の地にある日本関係資料ならではの軌跡がうかがえ、資料の内容のみならずその背景に至るまで、資料にアプローチするための糸口がいくつも見つかるようなおもしろみを覚えます。

こうした個人からの資料寄贈は現在も続いています。もともとプランゲ文庫では、その収集対象を日本の占領期（1945～1952年）の資料に絞っていましたが、厳密な定義にこだわらず、占領期の空気が残る1950年代まで対象期間を拡げた結果、1955年から1956年の日本の風景を捉えた写真とスライドを含む「ジョージ・P・デメロカス文書」^③を入手したそうです。プランゲ文庫は、いまでも生きて育ちつづけているのです。

東京とその近郊

1945年11月に来日するまで、日本のことをほとんど知らず、偏見すら抱いていたというコーラーは、PXで買い求めたカメラに「はまり」、そのカメラを携えて空き時間に東京を巡り歩きました。



メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵
マリー・コーラー・スライドに記録された占領期日本



(上段) 右から、銀座にあったPX、国会議事堂近くの一角、皇居の堀で釣りをする子どもたち。
(中段) 右から、皇居の護衛に立つオーストラリア人とアメリカ人GI、街角にやってきた紙芝居。
(下段) 右から、盆栽庭園、上司の家（接收された日本家屋）での食事会。

鴨場

宮内省（府）による接待の場のひとつ。捕った鴨を共に食して杯を交わし、コーラーの言によると「勝者と敗者が親交を深めました。」



農村・漁村

天然資源局の現地調査や旅行で、農民と漁民の生活を撮影しました。



箱根で行われた「愛林日植樹行事」。昭和天皇が臨席した。

日本各地



(上) 広島の本爆ドームと原爆ドームのそばにあった古書店「アトム書房」

(左) 長崎の本爆遺品展示場内部



スライドショーはこう締めくくられます。

「わたしが日本から持ち帰ったもの—『東海道五十四次』や人形、象牙の根付、着物—のうち、とくに大切に思っているのは、ひとびとの思い出です。最初は謎めいて見えたものですが、後になるとそんなことはありませんでした。裕福なひとから貧しいひと、父親たち、母親たち、老いたひとびと、若い恋人たち、花嫁、かわいい少女たち、漁師たち、アイヌのひとたち。そして小さな子どもたちにはいつも惹きつけられたものです。わたしは子どもたちの小さな顔をいつまでも忘れないでしょう。日本の子どもたち、あるいは世界中の子どもたちが今後、戦争の恐怖を味わうことのないよう、切に願っています。」



展示会“FUJI: Mountain as Metaphor in Postwar Japan”の様子。展示会チームの一員として、学生アシスタントもギャラリートークを担当しました。
Photography by Tory Salvador, UMD Libraries (5点とも)

アウトリーチ活動 — 展示会

2023年1月から3月にかけて、ホーンベイク図書館にある資料閲覧室（メリーランド・ルーム）のギャラリーで、ブランゲ文庫の資料を用いた展示会が催されました。^⑤ “FUJI: Mountain as Metaphor in Postwar Japan”と銘打ち、横山大観や梅原龍三郎などによる絵画を通して、戦後日本の表象としての富士山の変遷を追うこの展示を発案したのは、清水レゼック素子さんです。2022年春に新しくブランゲ文庫のスタッフに加わった清水さんは、「不変」に屹立する富士山が新時代の到来に伴って、その象徴するものを変化させてゆくさまを多くの資料から取り出し、展示を通して再構成してみせました。

英語圏において日本語の刊行物で観衆を引き寄せるのは簡単なことではありませんが、それは元美術館キュレーターとして長年の経験を持つ清水さんの面目躍如とするところ。資料の補修を担当するガフケさんと協力しながら、視覚的・立体的にインパクトのある資料を中心に据え、コンパクトでいて観客の目を惹くようなレイアウトを編み出していました。そして日本語を解さない観

展示会とブログ

2022年12月のホリデー・シーズンには、メリーランド大学図書館の特別コレクション部門による合同展示会“The Joy of Cooking in Special Collections”（特別コレクションに見る、料理のたのしみ）が開催されました*。

わたしもその美味しそうな企画に誘われて、プランゲ文庫にある料理本のレシピを見ながらどら焼き作りに挑戦し、プランゲ文庫ブログでその顛末を報告しました。日本語・英語両方で週1、2回の頻度で更新されるこのブログは、今年で開設10年を迎えました。プランゲ文庫の行っている、息の長いアウトリーチ活動の一環です。



筆者がプランゲ文庫のブログに執筆した「どら焼きでホリデー気分」
<https://prangecollectionjp.wordpress.com/2022/12/14/%E3%81%A9%E3%82%89%E7%84%BC%E3%81%8D%E3%81%A7%E3%83%9B%E3%83%AA%E3%83%87%E3%83%BC%E6%B0%97%E5%88%86/>

* “New Exhibit: The Joy of Cooking in Special Collections.” Special Collections & University Archives, University of Maryland Libraries. 2022-12-13,
<https://hornbakelibrary.wordpress.com/2022/12/13/new-exhibit-the-joy-of-cooking-in-special-collections/>



展示会“The Joy of Cooking in Special Collections”でのプランゲ文庫からの展示資料



合同展示会用の展示を設える清水さん



資料を整備するガフケさん
Photography by Tory Salvador, UMD Libraries

客に、いかに日本の文化的文脈を伝えられるかが、もうひとつの難所です。解説ラベルには、鑑賞に必要な情報が惜しみなく盛り込まれていましたが、それはあくまで簡潔な内容で、観客が自由に富士山の象徴性を考えるのにじゅうぶんな余白が残るものでした。

清水さん曰く、この展示会には裏テーマともいえるものがありました。戦後しばらくして紙不足が緩和し、出版物の流通が盛んになり、さらに複製技術が高度に発達して普及していくにつれて、社会のなかで富士山のイメージが増殖していきます。展示ケースに並んだ戦後発刊の美術誌や児童書、外客向け観光パンフレットは、日本国内外に向けて、戦後の「日本」を代表する存在としての富士山をあらためて印象づける媒体でした。神秘なる崇拜対象であった富士山が、現代社会においてポップ・アイコンとして遍在するまでの過程を考えると、イメージの質的・量的変化を促した占領期は大きな転点であったといえるでしょう。その前日譚を象徴するように、複製された富士山の嚆矢とも言える「凱風快晴」（葛飾北斎『富嶽三十六景』より、通称「赤富士」）が掲げられていたのも印象的でした。



(上) 占領軍による検閲についてのレクチャー

(右) 資料の実物を見ながら学生の質問に答えるジェンキンスさん



「教育の場」としての 「プラランゲ文庫」

プラランゲ文庫でキュレーターを務めるジェンキンスさんは、メリーランド大学図書館で東アジア研究をサポートする司書でもあります。アメリカの司書は授業にも積極的に関与して、学生の研究活動の導き手となることが少なくありませんが、ジェンキンスさんも例外ではありません。教授と打ち合わせを重ねながら綿密な授業プランを練り、その時々

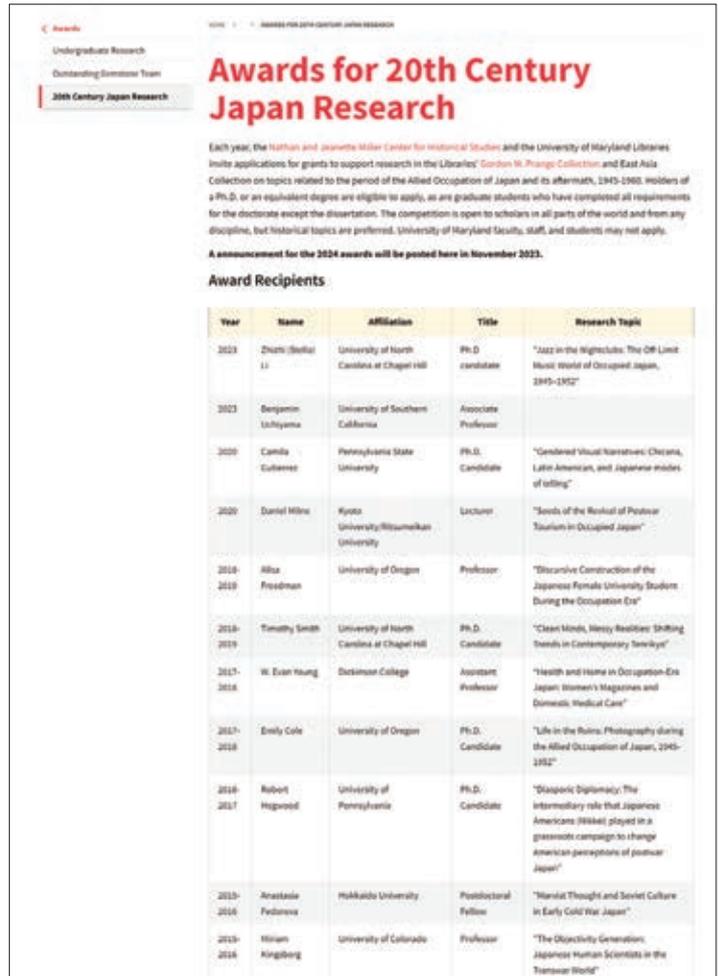
の授業のねらいとレベルに合わせて、授業に用いる資料を慎重に選びます。この準備にだいぶ時間がかかります。この準備にだいぶ時間がかかるといいますが、ジェンキンスさんによれば、偶然に新しい発見に恵まれることも多いので、難しいながらも楽しい時間なのだそうです。

プランゲ文庫資料の核ともいえる、検閲処分を受けた資料群はもろろん、毎度のように取り上げられる題材です。ジェンキンスさんの担当する授業は必ずしも日本研究専攻の学生を対象とするものばかりではないので、たとえば日本語を履修していない、あるいは日本語能力がまだ十分に備わっていない学生向けには、実際に削除処分を受けたイラストを含む紙面や漫画を用意し、学生に自らその資料に触れてもらい、占

領軍の検閲方針である「プレスコード」や「キーログ」²⁾を参照しながら、必ずしも資料に明記されていない処分理由や検閲の背景について、学生自ら考えるよう促していきます。オリジナルの資料が常になんらかの解を示してくれるというわけではありませんが、資料を直接手に取ってそのオーラに触れることで、学生の思考の開口まぐちのようなものが広がっていく様子が、授業を見学しているわたしにも伝わってきました。

ジェンキンスさんの目標は、プランゲ文庫が日本研究専攻以外の学生にも広く知られて利用されることだといえます。プランゲ文庫の所蔵する検閲済み資料の価値は、当然その本文だけにあるのではなく、検閲プロセスに使用された、あるいは検閲処分を受けた現物であるという歴史的文脈が加わります。現物に残る痕跡とインパクトは、学生の研究対象が何であるかにかかわらず、基礎的な思考力を育てる十分な教材になるというわけなのです。

さて、授業以外にも教員や学生と関わり、支援する仕組みはいろいろあります。たとえば先述の展示会では、日本美術史を専攻する学生アシスタントの貢献がありました。学生にとっては、知識をインプットするだけでなく、得た知識をどのように



- 1 “ゴードン・W. プランゲ文庫.” University Libraries. University of Maryland.
<https://www.lib.umd.edu/ja/collections/special/japan>
 - 2 “ゴードン W. プランゲ文庫の資料検索・利用方法 / プランゲ文庫が所蔵する寄贈資料.” University Libraries. University of Maryland.
<https://lib.guides.umd.edu/c.php?g=563959&p=3885077>
 - 3 “Mary Koehler slides.” University Libraries. University of Maryland.
<https://archives.lib.umd.edu/repositories/2/resources/472>
 - 4 “George P. Demeroukas papers.” University Libraries. University of Maryland.
<https://archives.lib.umd.edu/repositories/2/resources/1868>
 - 5 “過去の展示会より.” ゴードン・W. プランゲ文庫ブログ. 2023-08-06,
<https://prangecollectionjp.wordpress.com/2023/08/06/%e9%81%8e%e5%8e%bb%e3%81%ae%e5%b1%95%e7%a4%ba%e4%bc%9a%e3%82%88%e3%82%8a/>
 - 6 メリーランド大学アート・ギャラリー所蔵品
 - 7 “検閲：民間検閲局文書.” ゴードン・W. プランゲ文庫ブログ. 2013-07-21,
<https://prangecollectionjp.wordpress.com/2013/07/21/imposing-censorship-sample-documents%e6%a4%9c%e9%96%b2-ccd/>
 - 8 “Awards for 20th Century Japan Research.” University Libraries. University of Maryland.
<https://www.lib.umd.edu/ja/node/248>
“研究助成”. ゴードン・W. プランゲ文庫ブログ.
<https://prangecollectionjp.wordpress.com/category/%e7%a0%94%e7%a9%b6%e5%8a%a9%e6%88%90/>
- ※ URL の最終アクセス日：2023 年 9 月 22 日

「20 世紀ジャパン・リサーチ・アワード」の近年の受賞研究リスト。文学から音楽、宗教に至るまでさまざまなテーマで研究がおこなわれています。
<https://www.lib.umd.edu/ja/node/248>

アウトプットしていくかという試みを重ねることのできる実践の場でもあるのです。
さらに学外の研究者向けとして、プランゲ文庫資料を用いての研究に対する助成金制度「20世紀ジャパン・リサーチ・アワード」が、歴史学部との共同で設けられています。助成金を受けた研究者は、メリーランド大学でレクチャーを行うなどして研究成果を共有し、プランゲ文庫との連携を保っています。研究者からの相談を受け、プランゲ文庫スタッフが紹介したことで目の目を見た資料も少なくなく、資料が研究に活かさ

プランゲ文庫の来し方行く末

アメリカの地にあつて、日本の特別な時期に関する資料がこれだけの規模で集まっているという意味だけでも、プランゲ文庫はやはり唯一無二のアーカイブといえるでしょう。また、アメリカ国内外から研究者がやってくる、日本研究の一大拠点でもあります。

資料の由来する地である日本ではなく、占領国アメリカでその資料が保管され、活用されてきたこと、それ自体にはいろいろな議論がありますが、かの地で戦後日本が様々な積され、多岐にわたるアプローチが生み出されていくまでの道行きは、なかなかスリリングです。プランゲ文庫は、常にそうであったように、これからも、世界に開かれた戦後日本研究の揺籃の地なのです。

ビジュアル資料を 探してみませんか

―動物の画像を例に―



人文総合情報室の書棚 総記・人文科学分野の事典や参考図書を多数見ることができる。

国立国会図書館の人文総合情報室では、絵画やイラストの探し方についての質問を受けることがあります。図書館は文字ばかりの本だけでなく、図版がたくさん掲載された図鑑や事典類を豊富に所蔵しています。図書館の資料を使えば、色々な図版を調べて、見つけることができます。そこで今回は、当館の資料も活用しながら、バラエティーに富んだ動物の図版の調べ方をQ&A形式でご紹介します。

ぜひ、あなたのお気に入りの動物を調べてみてくださいね！

目次

家紋に描かれた動物―ウサギ	15
リアルに描かれた動物―ライオン	16
西洋の絵画に描かれた動物―ウシ	17
日本の絵画等に描かれた動物―イヌ	18
新聞記事に取り上げられた動物―ネコ	20
童話の中に登場する動物―オオカミと七匹の子ヤギ	21
国立国会図書館のウェブサービスを使って動物を探す	22
おまけ 表紙いっぱい動物！	24

家紋に描かれた動物—ウサギ

Q: 我が家の家紋はウサギがモチーフです。でも周りでウサギの家紋の人を見たことがないのですが、他のウサギ紋の調べ方ってありますか？

A: モチーフから家紋を調べることができます！

例えば、『家紋大事典』はモチーフとなった図像から家紋を調べることができます。項目「一覧(掲載順)」によると「兎」の項目は65〜66頁にあり、複数のウサギ紋の例が掲載されています。

この他にも、国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できる「国立国会図書館デジタルコレクション」を確認してみると、いくつか家紋に関する資料がデジタル化されています。検索する時は、本のテーマを表している「件名」の欄に「紋章」と入力して検索してみてください。

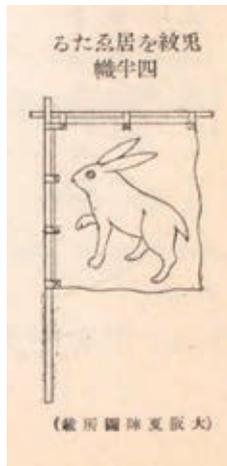
検索結果を見ていくと、『日本紋章学』に辿り着くことができます。第二卷(各論)第三篇(動物門)に「第四章 兎 蝙蝠」(761〜763頁)があり、実際のウサギの家紋2点と兎紋をあしらった幟が紹介されています。

また、『家紋事典 家紋の由来と解説』

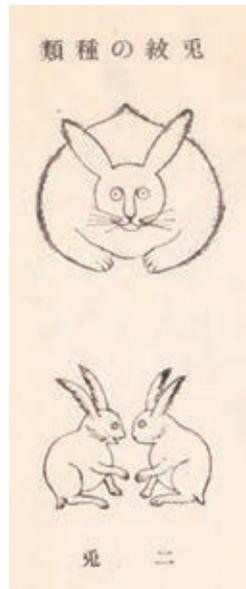
94頁にも「兎(ウサギ)」の項があり、真向き兎等6点の家紋が掲載されています。



(扉)



(p.762)



(p.762)

沼田頼輔『日本紋章学』明治書院, 1926
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879378/1/4>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879378/1/430>

家紋の詳しい調べ方は、リサーチ・ナビ「家紋を調べる」にもまとめていますので、参考にしてください。



「家紋を調べる」(リサーチ・ナビ)
https://mnavi.ndl.go.jp/jp/guides/post_1127.html

◇引用文献

高澤等『家紋大事典 Encyclopedia of KAMON』東京堂出版, 2021, pp.65-66<GB8-M37>

沼田頼輔『日本紋章学』明治書院, 1926, pp.761-763
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879378/1/430>

大隈三好『家紋事典 家紋の由来と解説』金園社, 1979, p.94
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12208214/1/51>

リアルに描かれた動物—ライオン

Q: 日本語表記の資料に掲載された写実的なライオンのイラストで、古いものを探しています。

A: 動物を写実的に描写したイラストを探している場合、動物名から調べられるレファレンスツールを活用するのが良いかもしれませんね。

人文総合情報室では、『日本古典博物事典 動物篇』、『博物図譜レファレンス事典 動物篇』、『資料日本動物史新装版』等を見ることができます。これらの資料には、掲載されている画像の出典が明記されており、元の資料を確認することができます。これらの資料を手がかりにすると、例えば江戸時代の代表的な百科事典である『倭漢三才図会』に、「獅子」が紹介されていることがわかります。『倭漢三才図絵』には空想上の動物等も紹介されているので、掲載されている画像が必ずしも写実的ではない場合があります。また、『資料日本動物史 新装版』の559～561頁の記述によれば、天明7（1787）年頃に書かれた『紅毛雑話』に、写実的なライオンのイ

ラストが掲載されていることもわかります。ちなみに、『紅毛雑話』では「レウー」（オランダ語の *Leeuw* から）と表記されています。



森島中良 編輯『紅毛雑話 5巻』天明7 [1787] 序・跋
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2537564/1/75>



寺島良安 編『倭漢三才図会 105巻首1巻尾1巻』
 秋田屋太右衛門 [ほか], 文政7[1824]
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2569722/1/5>

◇引用文献

小林祥次郎『日本古典博物事典 動物篇』勉誠出版, 2009<KG2-J31>

日外アソシエーツ株式会社 編集『博物図譜レファレンス事典 動物篇』日外アソシエーツ, 2018<M1-L12>

梶島孝雄『資料日本動物史 新装版』八坂書房, 2002, pp.559-561<GB97-G60>



子牛の誕生 シカゴ美術館蔵
 “Peasants Bringing Home a Calf Born in the Fields”(The Art Institute of Chicago)
 Jean François Millet
 出典 “The Art Institute of Chicago”
<https://www.artic.edu/artworks/111648/peasants-bringing-home-a-calf-born-in-the-fields>

西洋の絵画に描かれた動物ーウシ

Q: ウシが出てくる西洋絵画をたくさん調べたいです。可能なら、ルネサンス以降の画家の絵画を探したいと思っています。

A: 絵画のタイトルからモチーフが類推できることが多いので、『美術品所蔵レファレンス事典 西洋絵画篇』等の事典類から調べるのが有効です。なお、ウシは「子牛」「牡牛」「牝牛」と表記されていることがあります。

『西洋美術作品レファレンス事典 絵画篇 19世紀中葉以前』で調べると、664頁にミレーの「子牛の誕生」という絵画があり、『25人の画家 現代世界美術全集』第4巻に掲載されていることがわかります。

また、西洋絵画はギリシア神話等がモチーフになっている場合があるので、

ウシが出てくる神話から調べることも有効です。

Q: ウシが出てくる神話は、どうしたら調べられますか？

A: いくつか参考になる資料があります。例えば、古今東西の神話についてまとめた『神の文化史事典』は巻末8〜26頁にキーワード索引が付与されており、動物の種類等から調べることができます。また、『カラー版神のかたち図鑑』を確認すると、266〜274頁にウシの姿をとる神々とその神話の内容がまとまっています。

これらの資料を確認すると、ギリシア神話の神様ゼウスが牡牛の姿になってエウロペを誘拐する神話があることがわかります。これをヒントに、キーワード「エウロペ」で『西洋美術全集 絵画索引』686〜689頁を確認すると、ブーシエの「エウロペーの掠奪」という絵画が『NHK ルーブル美術館 6』に掲載されていることがわかります。

同書では、掲載画像は白黒ですが、所蔵館であるルーブル美術館のウェブサイトに (<https://collections.louvre.fr/>) からコレクションを検索すると、カラーの画像を確認することができます。



エウロペーの掠奪 ルーブル美術館蔵
 “L'enlèvement d'Europe” (Musée du Louvre)
 François Boucher
 画像出典 “Wikimedia Commons”
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fran%C3%A7ois_Boucher_-_The_Rape_of_Europa,_1747.jpg

◇引用文献

日外アソシエーツ株式会社 編『美術品所蔵レファレンス事典 西洋絵画篇』日外アソシエーツ, 2017<K1-L23>

日外アソシエーツ株式会社 編『西洋美術作品レファレンス事典 絵画篇 19世紀中葉以前』日外アソシエーツ, 2005, p.664<K2-H19>

松村一男・平藤喜久子・山田仁史 編『神の文化史事典』白水社, 2013 巻末 pp.8-26<HK2-L2>

松村一男・平藤喜久子 編著『カラー版神のかたち図鑑』白水社, 2016, pp.266-274<HK71-L23>

東京都立中央図書館 監修『西洋美術全集 絵画索引』日本図書館協会, 1999, pp.686-689<YU1-5594>

『25人の画家 現代世界美術全集』第4巻, 講談社, 1981, 図42<KC16-870>

『NHK ルーブル美術館 6』日本放送出版協会, 1986, p.100<K16-307>

日本の絵画等に描かれた動物—イヌ

Q: 江戸時代に書かれたイヌのイラストを調べたいです。イヌだけが描かれたものだけでなく、人々がどのようにイヌと接していたかわかる資料もほしいです。

A: 江戸時代の代表的なビジュアル資料として、草双紙や浮世絵等*があります。

*草双紙は江戸時代以降に流行した大衆向け絵入り小説の総称です。浮世絵には、江戸時代の風俗を画題としたものが多くあります。

犬は人々の生活に身近だったため、それらに描かれている事例を多数見つけることができます。

該当件数が多いので、事典類を確認することをおすすめします。まず、『民俗風俗図版レファレンス事典 古代・中世・近世篇』の巻末にある「名称索引」を確認すると842頁に「犬〔江戸・芸能・遊戯・娯楽〕」があることがわかります。本文を見てみると、『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』の252～253頁に関連の図版が掲載されていることがわかります。

以上の情報を元に、『絵でよむ江戸

のくらし風俗大事典』を開き、実際の画像を探していきます。例えば、犬と戯れる少年のイラストが紹介されており、出典として『通気智之銭光記』3巻が紹介されています（下図の左下部）。

次に『浮世絵事典 定本』上巻の61頁「犬」の項目を見れば、イヌが題材の浮世絵が何点か例示されています。そこに書かれている画題や作者名をヒントに、さらに浮世絵を探していくとよいかもしれません。

また江戸時代に盛んに飼育され、上流階級の女性達に抱き犬として愛玩されていた犬種に「狎ちん」があります。「狎」をキーワードに検索しても、関連する資料を見つけることができます。

事典類だけでなく、関連する展覧会図録を確認することも、有効な手段の一つです。例えば、『浮世絵に描かれた犬と猫』という展覧会図録に、犬が描かれた浮世絵がまとまっています。



山東京伝 戯作『通気智之銭光記 3巻』[鶴屋喜右衛門] [享和2(1802)] 「碁の段」
<https://dl.ndl.go.jp/pid/9892398/1/8>
 タイトルに入っている「銭光記」は算術書『塵劫記』をもじったものです。庶民の心得を算術にかけてまとめています。



楊洲周延 [画]『千代田の大奥 狎のくるひ』 福田初次郎
 明治 29 [1896] (『千代田の大奥』所収)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1302666/1/3>

楊洲周延（橋本周延）は美人画に優れ、江戸城大奥の風俗画等で知られています。本作は3枚つづりで、大奥で飼われていた狎の様子が描かれています。

インターネット上から浮世絵を調べる方法もあります。リサーチ・ナビ「浮世絵の図版を探す」に役立つサイト情報をまとめていますので、参考にしてください。このページでも紹介するように、国立国会図書館デジタルコレクションの古典籍資料（貴重書等）のコレクション検索で対象欄の「錦絵」を選択すると、国立国会図書館で所蔵している浮世絵等を検索することができます。タイトルに「狎」を入力して検索すると、遊ぶ2匹の狎が描かれている「千代田の大奥 狎のくるひ（千代田の大奥）」という資料がヒットします（左図）。



「浮世絵の図版を探す」(リサーチ・ナビ)
https://rnavi.ndl.go.jp/jp/guides/post_697.html

展覧会図録の探し方は、リサーチ・ナビ「展覧会図録・カタログ（展観目録）を探す」にもまとめていますので、参考にしてください。



「展覧会図録・カタログ（展観目録）を探す」(リサーチ・ナビ)
https://rnavi.ndl.go.jp/jp/guides/theme_honbun_101074.html

◇引用文献

日外アソシエーツ株式会社 編『民俗風俗図版レファレンス事典 古代・中世・近世篇』日外アソシエーツ, 2016, p.842<GB1-L29>

棚橋正博・村田裕司 編著『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』柏書房, 2004, pp.252-253<GB371-H13>

吉田暎二『浮世絵事典 定本』上巻 第2版, 画堂堂, 1990, p.61<KC2-E5>

『浮世絵に描かれた犬と猫』浮世絵太田記念美術館, 1997 <KC16-G1441>

新聞記事に取り上げられた動物—ネコ

Q. 昔の新聞記事で、服を着せられて二本足で立つネコの写真を見たことがあります。たぶん大正時代の記事だと思いますが、調べる方法がありますか？

A. 新聞記事やその画像を調べている場合は、各新聞社が提供しているデータベースを検索してみてください。

例えば、『読売新聞』の記事を検索できるデータベース「ヨミダス歴史館」(国立国会図書館内や一部の大学図書館、公共図書館等で利用可)では、写真が掲載された新聞記事だけに絞って検索ができます。「明治・大正・昭和1874—1989」をクリックし、検索してみます。

検索語「ネコ」、写真有無の項目で「写真付き記事のみを対象として検索します。」にチェックマークを入れて大正時代に絞って検索すると、大正15(1926)年5月17日の夕刊10頁の記事に「オベベを着たニヤアニヤ」という記事が見つかります。服を着て、二本足で立つネコの写真が掲載されています。



『読売新聞』夕刊, 大正 15 (1926) 年 5 月 17 日付
画像出典: 当館所蔵マイクロフィルム『読売新聞』<YB-41>

童話の中に登場する動物—オオカミと七匹の子ヤギ

Q、明治期に訳された『グリム童話』の「オオカミと七匹の子ヤギ」があるようですが、タイトルで検索しても出てきません。多分挿絵があるはずなので、それが見たいです。

A、当時の翻訳でのタイトルが「オオカミと七匹の子ヤギ」でない可能性があります。まずは、どのようなタイトルで翻訳されたのかを特定する必要があります。

そこで、『日本におけるグリム童話翻訳書誌』（翻訳研究・書誌シリーズ1）を確認します。巻末に「グリム童話翻訳文学年表1（明治編）」があり、明治20（1887）年に「八ツ山羊」、明治22（1889）年に「狼と七匹の羊」、「おほかみ」、「狼と幼山羊」等のタイトルで翻訳されたことがわかります（129～131頁）。現物を確認すると、『八ツ山羊』と『おほかみ』に挿絵があります。



グリム 原著 [他] 『おほかみ』（家庭叢話；第1）吉川半七，1889
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1169961>

登場キャラクターが着物を着ている等、西洋の文化に馴染みのない当時の人々が理解しやすいような工夫がなされています。



呉文聡 訳『八ツ山羊』（西洋昔噺；第1号）弘文社，1887<特44-682>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1168879/1/5>

右頁は子ヤギたちに疑われないために、オオカミがペンキ屋に行って足の先を白く塗ってもらっている場面。

◇引用文献

川戸道昭・野口芳子・榊原貴教 編著『日本におけるグリム童話翻訳書誌』（翻訳研究・書誌シリーズ；1）ナダ出版センター，2000，pp.129-131<KS357-G39>

国立国会図書館のウェブサービスを使って動物を探す

国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/>



国立国会図書館デジタルコレクションには「画像検索」(<https://dl.ndl.go.jp/search/image>)という機能があり、手元の画像やインターネット上の画像から雰囲気の近い画像を検索することができます。また「便利ツール」(<https://dl.ndl.go.jp/tool>)からは、画像を検索する時に役立つ資料を検索することができます。例えば、「明治から昭和前期に刊行された写真集」を選択し、「事項編」のうちの「生物・標本」を選ぶと、動物の写真集などを探すことができます。

Q・ネコやウサギ等、様々な動物のイラストを探しています。国立国会図書館のデータベースで検索ができると思います。が、どんなものがありますか？

A・国立国会図書館は所蔵資料の一部をデジタル化して提供しています。図版を調べている場合は、国立国会図書館デジタルコレクション、次世代デジタルライブラリーが便利です。電子展示会のNDLイメージバンクでもさまざまな画像をテーマ別にまとめて提供しています。

次世代デジタルライブラリー
<https://lab.ndl.go.jp/dl/>



「画像から検索する」(<https://lab.ndl.go.jp/dl/illustration>)をクリックし、「単語や文章から」を選んでください。検索窓が表示されるので「ネコ」と入力すると、ネコの画像がたくさんヒットします。「可愛いネコ」「遊ぶネコ」等、キーワードを変えると違った画像が見つかります。お好きなキーワードで検索してみてください。

ちなみに、「手元の画像から」を選択すると、自分の持っている画像から検索することができます。名前はわからないけど、似たような動物の画像を探したい時など、手書きのイラストから画像を探したい時に便利です！

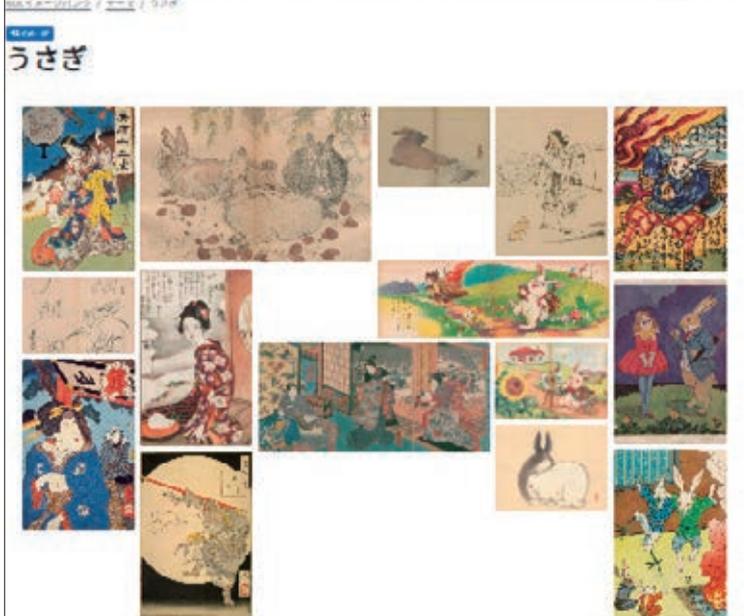


手書きのイラスト

(本誌関連記事)

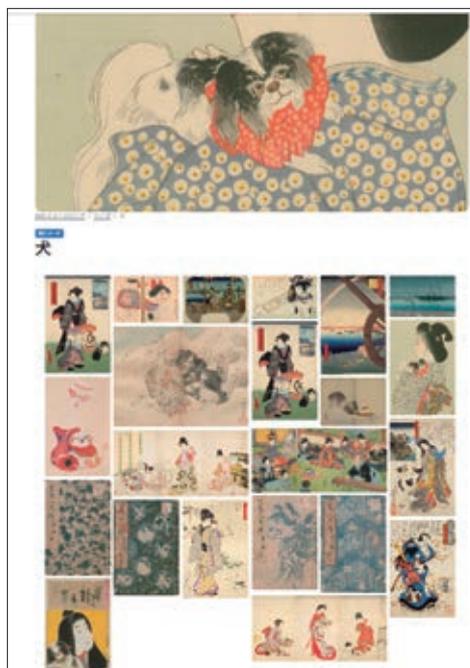
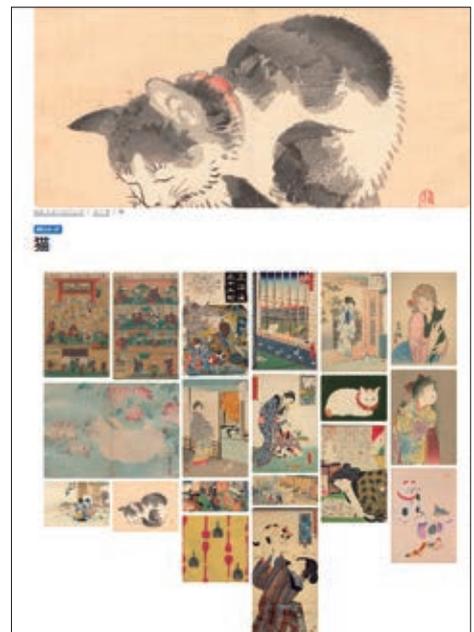
「画像の「中身」を検索する次世代技術」『国立国会図書館月報』746, 2023.6, pp.19-25

https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_12878025_po_geppo2306.pdf?contentNo=1#page=21



NDL イメージバンク
<https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank>

NDL イメージバンクでは、「描かれた動物たち」というテーマで動物の画像をまとめています。うさぎ、猫、犬をはじめ、さまざまな動物の画像を集めています。ぜひ見てみてください。



(上段) 「NDL イメージバンク」 「うさぎ」 のページ
<https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank/data/post-151.html>
 (下段右) 「NDL イメージバンク」 「猫」 のページ
<https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank/data/post-147.html>
 (下段左) 「NDL イメージバンク」 「犬」 のページ
<https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank/data/post-146.html>

おまけ 表紙いっぱいの動物!

この頁に掲載した『南総里見八犬伝』の表紙には犬のイラストが満載です。他の巻を見ても、表紙以外にも、裏表紙や目次にもイヌが描かれています。丸っこいイヌから、シュッと凛々しいイヌまで、様々な表情が印象的です。
あなたのお気に入りには、どの巻でしょう
か？



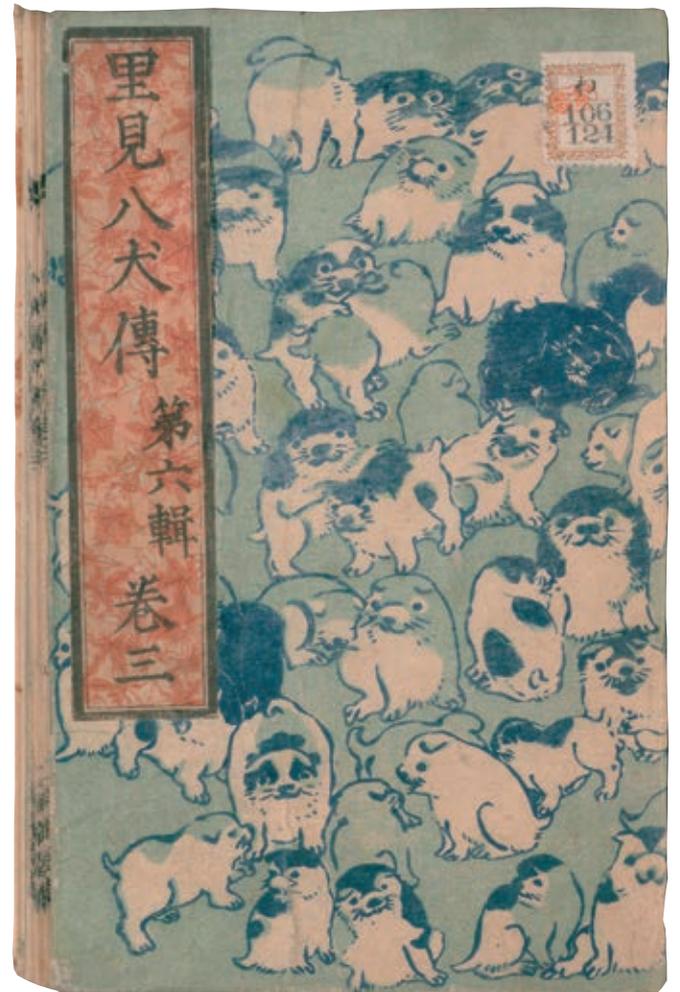
(上) 曲亭馬琴 作『南総里見八犬伝 9 輯 98 巻』丁子屋平兵衛 [ほか] [文化 11- 天保 13 (1814-1842)] 第 3 輯 卷 1

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2551598/1/2>

(右) 曲亭馬琴 作『南総里見八犬伝 9 輯 98 巻』丁子屋平兵衛 [ほか] [文化 11- 天保 13 (1814-1842)] 第 6 輯 卷 3

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2551615/1/2>

丁子屋平兵衛は、八犬伝初版の第 8 輯以降の版元 (後に全巻刊行) です。



(利用者サービス部 人文課 西口真梨奈)

私は現在、人文課人文第一係に所属しており、レファレンスサービスや、当館ウェブコンテンツ「リサーチ・ナビ」の編集、資料のデジタル化業務などを行っています。人文課には人文総合情報室・古典籍資料室・地図室という三つの専門室があり、人文第一係は人文総合情報室でのレファレンスサービスを担当しています。レファレンスでは人文科学分野の資料案内や、資料の所蔵機関連のご依頼をお受けすることが多いです。とりわけお受けすることが多いのはご先祖調べ。

江戸時代に越前屋という屋号で薬種問屋をしていた太郎次郎（仮名）という商人について調べているんですけど……

カウンターに座っていると、そのような形で利用者の方がお尋ねになります。

「太郎次郎は一体何者？」と思って、よくよくお話を伺うと、なんと「先祖だということ！」「家系図のここに名前が出てくるんですけど」とお持ちになった家系図を広げてくださいます。

さてそこからは利用者の方と二人三脚。まずは分かっている情報を整理していきます。「太郎次郎は大阪で商売をしていたらしい」、「天保5年頃は道修町付近に住んでいたようだ」などなど。

活動していた場所や時代、周辺人物の情報から少しずつ「太郎次郎」に近づいていきます。開架資料の人名辞典や国会図書館デジタルコレクションの全文検索、他機関のデータベースなどを駆使して少しでも情報がないかと探し回ります。そうして苦労して資料の片隅に「越前屋太郎次郎」の名前を発見することができました。

「太郎次郎、ここにいたんですね……」と利用者の方がしみじみ仰ると、こちらも胸が熱くなります。利用者の方がお持ちの家系図に書かれた「太郎次郎」と、資料に書かれた「太郎次郎」が同一の人物であると判った瞬間の喜びは何にも勝るものがあります。

レファレンスをしていると、資料はそれを求める人に読まれて初めて意味を持つのだなと深く感じます。そして資料と人が出会う手助けをするのがレファレンスサービスなのかな、と思います。とはいえ、実際にうまく資料を見つけるのは至難の業。資料とデータベースに揉まれて悪戦苦闘の日々です。ただ、いいレファレンスができた日の晩ごはんは、ちょっとだけおいしいものです。
(人文課 人文第一係 人文屋太郎次郎)

人と資料の 出会いを 手助けする仕事

——レファレンスサービスの現場



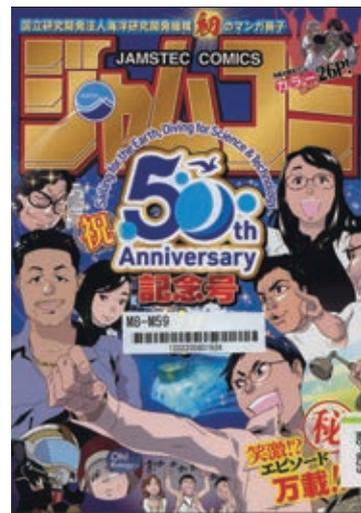
ご先祖調べの文献をひもとく職員
人文総合情報室の「人物・系譜」
の書棚にて



本屋に

ない

本



ジャムコミ
JAMSTEC comics : sailing for
the earth, diving for science &
technology
祝50th anniversary 記念号!!

[海洋研究開発機構] 刊
[2022] 49 p ; 19 cm
<請求記号 M8-M59>
表紙画像提供：海洋研究開発機構

高校生の頃、深海をテーマとして開かれた展覧会へ行く機会があった。ヒトから見た深海の環境は厳しい。太陽光は届かず、低温、高圧、場所によつては海底下からの熱水や化学物質にさらされる。だが、そんな深海にも生物は存在している。工夫を重ねて深海に棲むその様子はこちらの想像を大きく超えていて、素直に感動した。展示されていた標本の多くに「JAMSTEC」の名前があり、そこで深海生物の研究がなされていることを知った。

JAMSTEC (ジャムステック) は海洋研究開発機構 (ジャムステック) は海洋に関する研究や技術開発を行う機関である。2021年には、前身である海洋科学技術センターの設立から数えて50周年を迎えた。本書は、その記念事業とし

てSNSで配信されたマンガ【ジャムコミ】新人ナビちゃんの潜航記録」を23編に編集し、冊子にまとめたものである。

「ジャムコミ」とは「ジャムステックコミックス」の略であり、JAMSTECの職員の方々を中心に制作された。新人職員「ナビちゃん」がさまざまな時代のJAMSTECに潜入し、その視点から、当時のJAMSTECで起こった出来事を職員の実体験に基づいてユーモアたっぷりに描く。

海洋科学技術センターが進められていた事業に「シートピア計画」がある。陸上とは環境が大きく異なる深海でも、ヒトは活動できるのかを探るためのものだ。マンガには、その一環で実施された72時間の断眠実験の様子が

描かれている。潜水した状態を再現し、高圧になった閉鎖空間で丸3日、被験者である職員4人で眠らずにいなければならない。そこで彼らはある行動に出るのだが、これには意表を突かれた。過酷な実験をどこまでも面白く切り抜けるという心意気を感じた。

海底の熱水噴出域でユノハナガニというカニが発見された際の逸話も印象深い。調査航海中、深海底の様子を映したモニターにカニを見つけて驚く本人を、居合わせた同僚たちがこんなところにかニなどいるわけないと茶化すコマがある。それほどカニが存在するというのには信じがたいことだったのだろう。専門的な知識を持ち合わせていない筆者にも、重要な発見であったことがわかる。ちなみに、ユノハナガニ

はその生息場所とは裏腹に、比較的飼育しやすい深海生物として知られている。このほかにも、調査での失敗談や突然始まる共同研究、50周年記念事業の裏話といったエピソードが収録されている。JAMSTECの歴史や事業はもちろん、現場の雰囲気まで伝わってくるものばかりだ。

冒頭の経緯から、筆者はつい、JAMSTECという深海生物を思い浮かべてしまう。しかし、JAMSTECが行ってきたことや手掛けていること、そしてJAMSTECの人々は、思っていた以上に多彩だった。海をフィールドとする、JAMSTECの奥深さを感じられる一冊だ。

冒頭の経緯から、筆者はつい、JAMSTECという深海生物を思い浮かべてしまう。しかし、JAMSTECが行ってきたことや手掛けていること、そしてJAMSTECの人々は、思っていた以上に多彩だった。海をフィールドとする、JAMSTECの奥深さを感じられる一冊だ。

奥深さを感じられる一冊だ。

(齊藤奈美歩)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

NDL Topics

令和5年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「震災遺産と地域文化の継承を目指して」

国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所は「東日本大震災アーカイブシンポジウム」を開催いたします。

東日本大震災に関するアーカイブの構築が各地で進む中、震災の痛手が深く復興に時間を要している地域においては、アーカイブの構築、公開は途に就いたばかりです。

本シンポジウムでは、東京電力福島第一原発事故による避難指示区域の解除が進み、今後アーカイブの構築が期待される地域から、様々な形で行われる震災記録と地域の歴史文化の伝承のための取組について報告し、各自自治体の現状や問題意識を共有します。

最後に、登壇者全員で、町民の避難が終わらず、また地域の景観が大きく変わろうとしている中で、震災の記録・記憶を含めた地域の歴史や民俗文化を継承する上での課題について議論します。

○日時

令和6年1月8日（月曜・祝日） 13時～16時

○会場

東北大学災害科学国際研究所多目的ホール

（仙台市青葉区荒巻字青葉468-1）

仙台市宮地下鉄青葉山駅下車 南1出口徒歩3分

会場の映像をウェブ会議システム（Zoom）を用いて事前登録者に対して同時配信します。

ただし、新型コロナウイルス感染症の状況により、オンライン開催のみの開催となる場合があります。

○プログラムと登壇者（敬称略）

【事例報告】

菅坪祐樹（大熊町教育委員会教育総務課副主任学芸員）

三瓶秀文（富岡町教育委員会生涯学習課課長補佐）

渡邊祐典（浪江町教育委員会事務局生涯学習課社会

教育係主査）

橋本靖治（双葉町総務課長兼秘書広報課長）

【進捗報告】

井上佐知子（国立国会図書館電子情報部主任司書）

柴山明寛（東北大学災害科学国際研究所准教授）

【パネルディスカッション】

（進行）柴山明寛

（パネリスト）報告者全員

○申込方法

「みちのく震災伝」掲載のシンポジウム案内（<https://www.shinokuden.irides.tohoku.ac.jp/symposium/20240108/>）からリンクしている「参加申込みフォーム」にてお申し込みください。定員（会場120名、オンライン300名）に達した時点で受付を終了します。

○問合せ先

東北大学災害科学国際研究所災害人文社会研究部門
災害文化アーカイブ研究分野

電話 022(752)2099

メールアドレス archiveforum@irides.tohoku.ac.jp

※シンポジウムの詳細については、「みちのく震災伝」ホームページをご覧ください。

「国立国会図書館オンライン」及び「国立国会図書館サーチ」のリニューアルに伴うサービスの休止について

（令和5年12月27日～令和6年1月4日）

国立国会図書館では、現在提供している「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン）」及び「国立国会図書館サーチ」を統合・リニューアルし、令和6年1月に新たなウェブサービス「国立国会図書館サーチ」として公開予定です。

このシステム切替えに伴い、令和5年12月27日（水）午後7時から令和6年1月4日（木）までの間、国立国会図書館オンライン及び国立国会図書館サーチへのログインを要するサービスの申込み等を休止します。

新しいサービスの概要や、サービス休止情報の詳細等を当館ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

「国立国会図書館オンライン」及び「国立国会図書館サーチ」の統合・リニューアル

<https://www.ndl.go.jp/use/2024renewal/>



利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解のほどお願いいたします。

NDL Topics

新刊案内

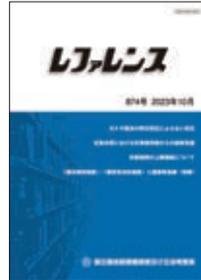
レファレンス 874号

カナダ憲法の明文改正によらない改正―司法省統合
版等における取扱いに注目して―

在英米軍における民事裁判権からの国家免除

労働時間の上限規制について

「超法規的措置」・「超実定法的措置」と国家緊急権（短
報）



A4 89頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104・0033 東京都中央区新川1・11・14

電話 03(3523)0812



38

東京本館

新館吹き抜けとダブルコラム

(2016年9月)

国立国会図書館月報

年間索引

一般記事

特集 国会議事堂の中の図書館	1	7-25
国立国会図書館 国会分館	1	8-11
建築史の専門家に聞く 堀内正昭氏インタビュー	1	12-15
帝国議会の“図書館”はどこにあったのか? (葦名 ふみ)	1	16-25
電子書籍・電子雑誌の収集範囲の拡大について—オンライン資料収集制度のご紹介—	1	27-29
国立国会図書館関西館開館20周年記念企画展示 万博タイムトラベル	1	30-31
林光の手稿譜を「読む」 (吉田 宗彰)	2	5-12
数字で見る国立国会図書館：『国立国会図書館年報 令和3年度』から	2	25-28
誌面でふりかえる企画展示 知識を世界に求めて	3	6-9
企画展示関連講演会「翻訳学の視座から読む明治の文学翻訳者の言説—なぜ、いかにして訳すのか—」 (齊藤 美野)	3	10-15
子ども読書の日「創造力は読書から」安藤忠雄氏講演録	3	16-17
デジタルコレクション、リニューアル～その機能を探る～	3	19-22
展示会「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」関連講演「スペインと中南米の子どもの本—この100年の変遷と今—」 (宇野 和美)	4	5-11
法令議会資料いま・むかし—調査方法の変遷— (三浦 修)	4	12-17
関西館開館20周年記念講演「コミュニケーションの進化と図書館の未来」(山極 壽一)	5	6-11
関西館開館20周年記念シンポジウム「これからの図書館—読書はどう変わる? デジタルでどう変わる?—」	5	12-13
新時代のビジュアルメディア・錦絵新聞 (鈴木 加茂太)	5	15-21
新型コロナウイルス感染症と国立国会図書館	5	22-28
特集 大学1年生のための国立国会図書館入門	6	4-17
はじめての国立国会図書館	6	5-7
『図書館に訊け!』著者に聞く 国立国会図書館をどうやって「私の」図書館にするか? (井上 真琴)	6	8-17
大公開! 画像の「中身」を検索する次世代技術	6	19-25
ミニ電子展示会「本の万華鏡」第33回 NINJA— <small>エンタメ</small> 虚像と実像—	6	26-27
小特集 古活字版	7/8	5-23
嵯峨本とは何か (小秋元 段)	7/8	6-15
伏見版『六韜』 <small>りくたう</small> 『三略』 <small>さんりやく</small> と『七書』 <small>しちしょ</small> について—慶長9年版『六韜』『三略』と慶長11年版『七書』の「六韜」「三略」が同版であること— (上田 由紀美)	7/8	16-23
第58回貴重書指定委員会報告：新たな貴重書のご紹介	7/8	24-27
ひなぎくでみる震災の記録	9/10	6-9
憲政資料のなかの関東大震災 (季武 嘉也)	9/10	10-21
ごぞんじですか? NDL Ngram Viewer	9/10	22-23
歴史学者 鳥海 靖 氏に聞く 伊藤博文の文書—研究と編纂を振り返って—	11	5-17
憲政資料室の新規公開資料から	11	18-25
国際子ども図書館展示会「おいしい児童書」	11	26-29
ビジュアル資料を探してみませんか—動物の画像を例に— (西口 真梨奈)	12	14-24

凡例

『国会のはなし』—新時代を担う若者たちに向けて—

(藤本 守)

1

3-6

記事タイトル

執筆者名

掲載号(月)

掲載ページ数

今月の一冊

『国会のはなし』—新時代を担う若者たちに向けて—	(藤本 守)	1	3-6
明治時代に描かれた器—『陶磁器意匠標本』—	(岩崎 依子)	2	1-4
『通俗伊蘇普物語』—明治時代のイソップ物語—	(横山 裕里恵)	3	1-5
『日本化学総覧』—日本の科学の発展に寄与した科学文献抄録誌—	(穴戸 真梨)	4	1-4
『大東京寫真帖』—写真で見る昭和初期の東京名所—	(伊東 祐介)	5	1-5
『虞列伊氏解剖訓蒙圖』—明治時代の解剖図集—	(米川 和志)	6	1-3
『女房三十六歌仙』—高まる江戸の教育熱—	(櫛来 亜矢子)	7/8	1-4
牧野富太郎の手紙—辛夷はコブシ、にあらざ—	(中嶋 恵子)	9/10	1-5
『海底二万里』—プラトンのアトランティス—	(舟口 永恭)	11	1-4
『河合ダンスグラフィック』—芸妓バレエ団とモダニズム—	(古野 朋子)	12	1-4

本の森を歩く

(第29回) 江戸時代の大酒飲み、大食い	(川本 勉)	4	19-29
----------------------	--------	---	-------

世界図書館紀行

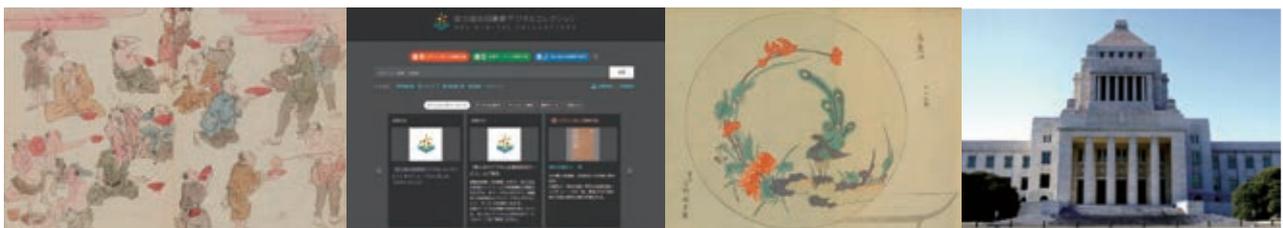
ルクセンブルク国立図書館	(中村 絢子)	3	24-31
プラング文庫「再訪」—プラング文庫の ^{いま} 現在をさぐる—	(吉家 あかね)	12	5-13

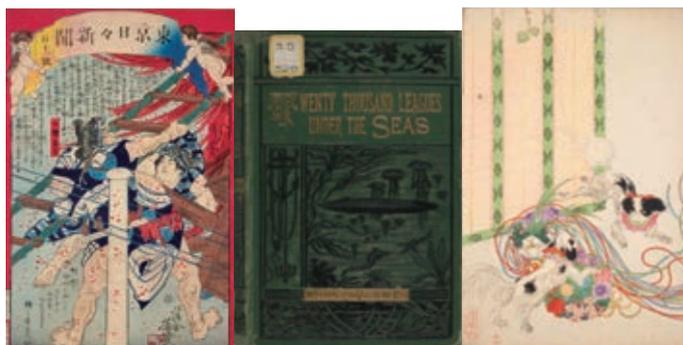
日本図書館紀行

特別編 京都市立京都学・歴史館		2	13-20
京都市立京都学・歴史館に勤務して	(加藤 大地)	2	14-17
様々な寄贈資料にみる歴史館の資料収集うらばなし	(松田 万智子)	2	18-20

NDL Ngram Viewer
を使ってみました

第1回 辞書編集の立場から	(森田 康夫)	9/10	24-25
第2回 “ノンポリ” と “非政治”	(佐藤 信)	11	30-31



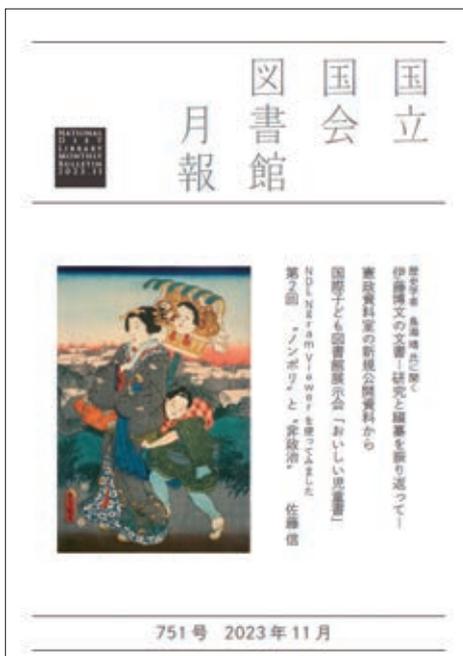
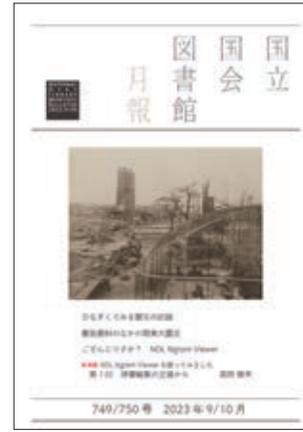


本屋にない本

閣議付議事項の件名等目録	(米井 大貴)	1	32
百香繚乱 高砂コレクション香りの図鑑 特別版	(西村 葉純)	2	22
日本の素朴絵	(塩畑 里紗)	3	23
足元から紐解く生活史 第34回企画展	(光島 有里)	4	30
萩原朔太郎詩集『月に吠える』一〇〇年記念展 ここからすべてが始まった	(前田 さらら)	5	29
こんにちは京都市電 「京都市電関係資料」をひもとく	(新庄 航人)	6	28
岡山の野鳥たち ~むかし・いま・みらい~	(勝田 真紀子)	7/8	29
概説高輪築堤	(中村 魁)	9/10	27
蘭字 知られざる輸出茶ラベルの世界 齋田記念館特別展	(杉野 晟也)	11	33
ジャムコミ = JAMSTEC comics	(齊藤 奈美歩)	12	26

館内スコープ

誰がために議官はある		1	26
史と志をつなぐ		2	21
大人にこそ伝えたい		3	18
未来の国立国会図書館職員を迎えるために		4	18
離れていてもコピーをどうぞ		5	14
僕たち典拠三兄弟		6	18
資料の入口はこちらです		7/8	28
寝不足の震度4		9/10	26
博士論文デジタル化の片隅で		11	32
人と資料の出会いを手助けする仕事——レファレンスサービスの現場		12	25



当館ホームページから、PDF ファイルを閲覧できます。
<https://www.ndl.go.jp/jp/publication/geppo/>

冊子版のご購入については、公益社団法人日本図書館協会へお問い合わせください。バックナンバーも取り扱っています。
 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812(販売)

12

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.12

NO.752

DECEMBER
2023

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Kawai Dance Graphic: A Geisha Ballet Company and Modernism
- 05 Travel writing on world libraries
Revisiting the Gordon W. Prange Collection
- 14 An introduction to Visual Search Tools: How to find
images of animals
- 25 <Tidbits of information on NDL>
Working at the Reference Desk: Helping patrons find the information they seek
- 26 <Books not commercially available>
Jamukomi = JAMSTEC comics
- 27 <NDL Topics>
- 29 Annual index to the National Diet Library Monthly Bulletin, Nos. 741-752

国立国会図書館月報

令和5年12月号 (No.752)

令和5年12月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 川西晶大

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.12

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士